

第2次大戦中に廃駅となり、横浜大空襲で焼け落ちて廃墟と化したこの小駅を、京浜急行は今なお、いわば“原爆ドーム”として保存しているのである。日常的な通勤風景の中に、ともすれば埋没してしまいがちな廃駅の姿に、みごとに歴史的景観としての意味づけが与えられているのは感動的であった。

一方、単に典拠を文献資料のみに求めるにとどまらず、たとえば、阪神電車の尼崎の霊安室の項では、職員からの聴きとり調査によって、この“historical landscape of fear”がよく描き出されている。社史等の引用で、固くなりがちな内容が職員の談話などのエピソードをはさむことによってうまく柔らげられており、知らず知らずのうちに引き込まれていく構成となっている。

ただ、評者が感じた若干の点をコメントさせていただくと、まず、特に、ずい道と橋りょうの章で、社史の引用によって、特定の大手建設会社が高く評価されている等、全般的に、企業側の立場が色濃くにじみ出ていることが気にかかる。

それに対し、鉄道を利用し、育てあげた地域住民側からとらえた考察には乏しいように思われる。

(田園調布駅の項あたりには若干散見するが…)

鉄道の歴史がある景観とは、単に鉄道関係の諸施設にとどまらず、鉄道が開通し、駅が開設されることによって発展、変貌していく沿線の景観も当然含まれるはずである。その意味で、本書には、まだ従来の産業考古学的の研究にとどまっている部分もあると言っては言いすぎであろうか。

もちろん、広くみれば、堀淳一氏のローカル私鉄の廃線跡歩きをまとめた著作(『消えた鉄道を歩く』講談社文庫、1986)なども、鉄道の歴史地理的研究に含まれるのであろうが、今後さらに研究対象や研究目的を絞っていく必要があるだろう。

“写真のある「あとがき」”でも触れられ、表紙カバーにもなっている阪急梅田駅など、少年の日の記憶に旧駅が残る評者としては、阪急グループの駅周辺の開発にともなう梅田駅界隈の景観変遷については、もっと詳述していただきたいところである。

同時に、京阪電鉄は著者の佐藤氏の勤務先という関係からか、巻末でエッセイ風に触れられるにとどまっているが、やはり評者の幼時の記憶に残る天満橋ターミナルや、新駅開業後もバス停に残された「京阪東口」の名称(評者の高校の最寄りバス停であった)もなつかしく、この両駅の景観変遷につい

ては、ぜひ項を設けていただきたかった。

しかし、幸い本書は第I集であって、あとがきによれば、三部作が予定されているとのことであり、続くシリーズに大いに期待したい。

さらには、国鉄が民営・分割化されようとしている現在、地方交通線の中には、第三セクター化や廃線となっていく路線も少なくない。大手私鉄14社をとりあげた本シリーズが完結した、その次の段階として、ぜひ減びゆく国鉄の歴史的景観をとりあげるシリーズも企画していただくことを著者に熱望して、筆を置きたい。(岩鼻通明)

八日市市史編さん室編

『八日市市の地名と景観』資料集II

八日市市教育委員会 1986年3月刊

B5版 153ページ 1,500円

野洲町史編さん室編

『明治の村絵図』古絵図集成

野洲町 1986年3月

B5版 75ページ(付図5) 1,500円

旧来より、条里型地割の復元や集落形態・土地利用の研究などに、地籍図が有効に用いられてきた。これに加えて、近年は日本地理学会の「地籍図研究グループ」(主査:西川 治)が設置されるとともに、地籍図の研究つまりその資料吟味の研究へと深化している。しかし、地籍図は、近世期の村絵図と比較して、資料集などとして公刊されることが少なかった。

このたび、滋賀県の八日市市と野洲郡野洲町において、地籍図の資料集が『八日市市の地名と景観』と『明治の村絵図』として刊行された。図版も多くなり、財政的にも困難な点が少なくなかったものと推察される。

さて、『八日市市の地名と景観』の構成は、次のとおりである。

1. 御園(13地区)
2. 建部・八日市(10地区)
3. 玉緒(6地区)
4. 中野(5地区)
5. 市辺(6地区)
6. 平田(6地区)

概説

地籍図は、1.御園から6.平田まで旧町村ごとに、明治26年測図の地形図を利用した検索図を添えて、

まとめられている。さらに各地区（江戸時代の村）には、明治初期の地籍図をトレースし土地利用や小字名が明記された図版が、1961年撮影の空中写真とともに印刷されている。地籍図が実感できるように、口絵として「近江国蒲生郡爪生津村地引全図」（明治6年）が、カラーで掲載されている。また、割付にも細部にいたるまで配慮がされ、原則的に右ページに地籍図が、左ページに同一スケールの空中写真が配置され、比較検討が容易にできるようになっている。各地籍図には、小字名・土地利用・地割など歴史的背景を中心とした解説があり、読図の手助けの役割を果たしている。

概説では、井戸庄三氏・足利健亮氏・吉田敏弘氏の3名の方々が、おのおの「八日市市の小字名の地名的特色」、「地籍図と地割」、「失われゆく地名と景観 ―その保存と記録化にむけて―」を執筆されている。井戸庄三氏は、八日市市の小字名について、条里地割に依拠した小字名・中世や近世の開拓に関連する小字名・民俗神に関連した小字名・灌漑関係の小字名が多く存在していること、および地名変更について、明治初期に佳字名称が用いられていたことなどを指摘されている。また、足利健亮氏は明治初期における地籍図作成の法的根拠について述べられた後、地割の特色を条里地割・開発地割・市場町地割を例にして、地形条件との関連とともに簡潔に指摘されている。これら両氏の指摘は、地籍図の判読の手助けとなっている。

これに対して、吉田敏弘氏は景観の変貌が著しいことを指摘しつつ、呼称地名・通称地名の調査方法を例に、地籍図の活用について言及されている。

一方、野洲町史編さん室編『明治の村絵図』の構成は、次のとおりである。

はじめに

1. 旧篠原村地域の絵図
2. 旧祇王村地域の絵図
3. 旧三上村地域の絵図
4. 旧野洲村地域の絵図

あとがき

地籍図は、大部分がカラーで印刷されており、眺めているだけでも知的欲求が満足されてくる。各地籍図ごとには、小字名およびその範囲が記入された地形図や『滋賀県物産誌』に基づく明治初年の村況が示されるとともに、小字名・地割・地形などを中心とした解説が加えられ、地籍図の判読が容易にできるよう配慮がなされている。さらに、付図として「明治25年・大正2年測図地形図」、「明治25年・26年仮製地形図」、「大正9年・11年測図地形図」、「昭和42年改測地形図」、「昭和35年測図地形図(3,000分の1を6,000分の1に縮小したもの)10枚」および条里制地割の典型的な集落として五之里集落の「明治6年五之里村地券取調総絵図」が、添えられている。

このような、地籍図の資料集が刊行されることは、今後ますます条里制研究や集落研究が進展することになろう。また、これらの資料集の刊行が契機となり、他の県市町村においても同様な地籍図の資料集が刊行されることが望まれる。

最後に、地籍図がこのように刊行されることによって、地籍図が学術調査・研究のみならず、吉田敏弘氏が指摘されたような市民・町民の方々による利用とともに、小学校における「身近な地域」の学習や中学校における地理・歴史融合学習の教材としての活用も、期待するものである。（古田悦造）